

めりたへ令嬢

嫁いだ先で幸せになる1

Lady Called "Plastered Wife" Got Married and Be Happy.

登場人物紹介

アーヴァイン・ワイエス
某国の貴族。20歳。魔道具マニア。

「もっとうフェミア嬢の事が知りたい」

「僕としても伴侶は自分で選びたいかな」

マティアス・ノディエ・ナゼール
ナゼール王国・王太子。18歳。

「甘い考えは捨てなさい。貴女に帰る場所なんて無いのだから」

ジュディ・ワード・アールグレン
ナゼール王国・ワード侯爵家夫人(継母)。36歳。

「それでは『ランベルト商会緊急』裏会議をはじめます」

グリンダ・ワード・アールグレン
ナゼール王国・ワード侯爵家令嬢(継子)。15歳。

「私より美しいなんて許せない!!」

「……色々ヒドイ(良い意味で)」

マリカ
ランベルト商会商品開発部員。14歳。ディルク命。

「どれだけ時間が掛かっても、必ずミアを見つけ出す！」

ハル
(レオンハルト・ティセリウス・エルネスト・バルドゥル)
バルドゥル帝国・皇太子。17歳。ミアの初恋の相手。

「もう一度ハルと逢えるなら、どんな事だって頑張れる！」

ミア
(ユーフェミア・ワード・アールグレン)
ナゼール王国・ワード侯爵家令嬢。15歳。継母と義妹に虐められている。

Contents

プロローグ	006
第一章 ハルとの出会い	021
ミアとの出会い(ハル視点)	064
第二章 めりかベ令嬢、お茶会に誘われる。	073
ナゼール王国執務室にて(エリーアス視点)	091
玉の輿大作戦(グリンダ視点)	098
第三章 めりかベ令嬢、舞踏会で不審者と出会う。	105
ユーフェミアとの出会い(アーヴァイン視点)	121
第四章 めりかベ令嬢、出奔する。	128
侯爵家厨房にて(デニス視点)	147
帝国からの使者(マティアス視点)	156
第五章 めりかベ令嬢、ランベルト商会へ行く。	163
ランベルト商会来客室にて(ディルク視点)	182
第六章 めりかベ令嬢、ランベルト商会で働く。	189
ランベルト商会研究棟にて(マリカ視点)	210
ランベルト商会緊急会議(ディルク視点)	219
第七章 めりかベ令嬢、要注意人物になる。	226
ランベルト商会緊急会議(マリカ視点)	242
閑話① もう一つのお仕事	250
閑話② ランベルト商会緊急「裏」会議	253
第八章 めりかベ令嬢、普通を目指す。	259
それからの侯爵家(ダニエラ視点)	277
エピローグ	290
閑話③ 初めての休日	292
縮む距離(ハル視点)	301

プロローグ

月の光が冴え渡る夜、白亜の城の大広間では王都中の貴族が集い、舞踏会を楽しんでいた。見上げるぐらい高い天井には美しい絵画が描かれ、等間隔に配置された煌びやかなシャンデリアからは暖かい光が降り注いでいる。

磨き上げられた大理石の床は天井からの光を反射し、美しく着飾った人々をより一層輝かせる。絢爛豪華な世界の中で、思わず目を奪われてしまう程圧倒的な存在感を放つ少女がいた。

彼女の名はグリンダ・ウオード・アールグレン——ウオード侯爵家令嬢である。

豊かな蜂蜜色の髪に澄み切った泉のような青い瞳。

美を具現化したような彼女の周りには、いつも光が満ち溢れている——そんな錯覚を人々に与えていた。

彼女の周りには沢山の取り巻き達があり、誰も彼もグリンダの気を引こうと躍起になっている。

「なんと美しい……」

「あの方がかのウオード侯爵家の令嬢か」

「では、彼女がマティアス殿下の筆頭婚約者候補……」

「さすがは筆頭と称されるだけはある。素晴らしい美貌ですな」

「いやいや、それがどうやら彼女は婚約者候補ではないらしいですぞ」

「んん？ 私は王家がウオード家に婚約を打診をしたと聞いていたのだが……」

グリンダに興味を持った貴族達が憶測でものを言う。

「ウオード侯爵は八年前に再婚しただろう？ 彼女はウオード侯爵の後妻の娘だね。本当の婚約者候補は……ええと、何処だったか……。ああ、いたいた。ほら、あそこさ」

貴族達の好奇の目が注がれる先にいたのは……銀色の髪をした野暮ったい令嬢だった。

「これはまた……」

「……う、うむ……」

いつもはおしゃべりな貴族達も口を噤んでしまい、その場に何とも言えない雰囲気漂う。

「本当にかの令嬢がその……ウオード侯爵の？」

「ウオード侯爵の奥方といえば、かつて社交界で名を馳せた美姫、ツェツィーリア嬢でしたな」

「だが髪の色以外似ていない様だ」

「ウオード侯爵家当主、テレンス卿も素晴らしい美貌を持った美男子でしたぞ」

「しかし、彼女がマティアス殿下の婚約者候補、ユーフェミア・ウオード・アールグレンだよ」

「……」

貴族達が信じられないという顔をしてユーフェミアを見る。

しかし、それも仕方のない事だった。

彼女は少し……いや、かなり厚化粧なのか、顔には白粉おしろいがふんだんに塗り込められており、さらに全身を覆うような薄い水色を基調としたドレスを着ている為、銀の髪と相まって、全体的に白っぽくのっぺりとした印象だったからだ。

ほぼ大広間の壁と同化しているようにも見えるので、そこにいると言われなければその存在に気付く人間は少ないかもしれない。

しかしじっくり観察してみると、背筋をピンと伸ばした姿勢やスタイルの良さが見て取れる。

だが、グリンダという比較対象が美し過ぎたのか、とてもではないが一国の王子の婚約者候補に名前が挙がるような容姿には見えない。

貴族達も内心「ないわー」と思うものの、この場では誰もそれを口にしない。

下手へたをすると、将来の王子妃への不敬となる可能性があるからだ。

それでもお茶会等の内輪の間ではいつもユーフェミアの話題で持ちきりであった。

その内容はとても本人に聞かせられないようなものばかりであったが。

大人しく存在感が無いユーフェミアが貴族達の噂うわさの種になるきっかけがあった。

それはある時、グリンダに心酔する貴族の青年が、グリンダが夜会になかなか出席出来ないのはユーフェミアと関係があるのではないかと質問したからだ。

グリンダは「お義姉さまが出席されないのに私が出席するわけにはいきませんから」と、少し眉まゆ

尻じりを下げ、寂し気に微笑ほほえんだという。

その儂はかなげで庇護欲ひごを掻き立てる様が、更に信奉者を増やしたらしい。

「自分の容姿に自信がないから減多めったに夜会に出席しない。だからグリンダ嬢も気を使って夜会に出席する事が出来ない」

ユーフェミアの我儘わがままのせいでグリンダは我慢を強いられている——そう思い込んだ一部の貴公子達が、ユーフェミアを憎々しく思うのも仕方がない事であった。

——そうしてユーフェミアについて色んな噂が社交界で飛び交う事になる。

「ユーフェミア嬢は醜みにくい顔を厚化粧で誤魔化ごまかしている」

「化粧の下には酷ひどい痣あざがある」

「殿下に避けられている」

「いつ婚約候補から外されるか賭けの対象になっている」

「屋敷ではグリンダ嬢の美貌を妬ねたんで暴言を吐いている」

「いつもグリンダ嬢に嫌がらせを働いている」

夜会に来てもほぼ壁の花と化しているユーフェミアは無表情で話しかけても反応が悪く、その態度が更に噂好きの貴族達の格好の餌食えじきになっていた。

あと三ヶ月程でマティアスが成人する為、社交界では殿下の婚約者選びが始まるらしいという噂

が広がり、ここ最近の舞踏会は令嬢達のお披露目や顔見せの場でもあった。

そのような状態になると、適齢期の令息達も多く出席する事になり、ある意味、出会いを求める若い貴族達のお見合いパーティーと化している。

貴族達が思い思いに歓談していると、ファンファーレが響き渡り、王族達が列席した事を告げる。精悍な顔立ちの国王と柔らかな微笑みを浮かべる美しい王妃、そして二人によく似た王子達。

華々しい王族達が姿を現す中、年頃の令嬢達の視線は美しい王子へと集中する。

ここ、ナゼール王国の第一王子——マティアス・ノディエ・ナゼール。

彼は少しウェーブがかつた明るい金色の髪と、新緑を思わせる緑の瞳を持つ美しい青年であった。

「ああ……マティアス様素敵……」

「ご一緒にダンスを踊って頂けないかしら」

「マティアス様に誘って頂けたら嬉しさのあまり失神しちゃいそうだわ」

「あのご尊顔を拝見出来ただけで出席した価値ありね」

国王の挨拶もそつちのけで、令嬢達は熱の籠った目で麗しい王子を見つめては、頬を染めながらため息を漏らす。

国王の挨拶が終わると、王宮楽団が曲を奏ではじめ、音楽が合図となり貴族達はそれぞれのパートナーを誘ってダンスを踊りはじめる。

パートナーがいない若い貴族達は、意中の相手をダンスに誘おうと声を掛けている。

そんな中、グリンダの周りには沢山の青年達が集まっていた。

「グリンダ嬢、今宵は是非私とファーストダンスを踊って頂けませんか？」

「いやいや、その名譽は是非私にお与え下さい」

「君は前回ファーストダンスを踊っていなかったかね？」

「君にはいい仲の令嬢がいるだろう？ 彼女を誘いたまえよ」

「そう言う君は奥方がいるだろう！」

青年達がグリンダと踊る権利を得ようと必死になっているところへ、一人の人物が近づいた。

その人物に気付いた人々から人垣が割れていき、中心にいた彼女へ涼やかな声が掛けられる。

「グリンダ嬢、私とダンスを踊って頂けませんか？」

優雅な微笑みを湛えたマティアスは、グリンダへと手を差し伸べる。

二人の様子を見ていた令嬢達からは黄色い声が上がリ、令息達からはため息が漏れる。

マティアスから誘われたグリンダは一瞬怯み、戸惑った様子を見せながらも王族からの誘いは断れないと思ったのか、そろそろと彼の手を取った。

「私でよろしければ、喜んで」

嬉しそうにはにかんで、優しく微笑むグリンダから、光がきらきらと零れ落ちる。

彼女の美しい様に、マティアスは思わず目を瞠った。



そうして美しい令嬢と王子が踊るその姿は、しばらく貴族達の間で熱く語り継がれる事になる。



煌びやかな舞踏会から静かな屋敷へと戻ったユーフェミアは、屋根裏にある質素な自分の部屋で汚れないようにドレスを脱ぐと、急いで化粧を落とす為の準備をはじめ。

ナゼール王国は温暖な気候の国で、冬と言っても雪が積もる事はない。

今は季節的に秋とは言え、夜は気温も下がりやや肌寒い。

しかし屋根裏には暖炉や浴室が無いので、桶おけに汲んだ水に浸した布で体を拭く事しか出来ない。

ユーフェミアは桶を用意すると呪文じゆもんを詠唱する。

「我が力の源よ たゆたう水となり 我が手に集え ウォーターボール」

彼女の手に現れた水が桶の中に降り注ぐ。

「我が力の源よ 燃え盛る炎となり 我が手に集え ファイアーボール」

魔法で現れた炎の玉が桶に入れられてお湯となり、温かな湯気上げる。

「これぐらいで大丈夫かな……」

ユーフェミアは湯の温度を確かめ、慣れた手つきで体を拭いていく。

お風呂お風呂が湯に流されると、少し日に焼けた健康的な肌が現れる。しかしその肌の色は貴族令嬢が持つ、透き通るような白い肌色とは違い、使用人や平民と同じ色だった。

それから彼女は風魔法と火魔法で温風を作り、濡れた肌を乾かしていった。

「あー、すっきり！」

白粉で塗り固められた顔や身体を綺麗に拭き取ると、妖精かと思紛う美しい顔が現れる。

もしここが先程の舞踏会の会場であつたなら、年頃の青年貴族達は拳って彼女にダンスを申し込んでいるだろう。

化粧を落としたユーフェミアはお仕着せの服を身に纏う。

その姿はどこから見ても使用人であつた。

しかし使用人にしては気品が溢れる整った顔立ちをしているので、どうしても違和感は拭えない。ユーフェミアが身支度を整えると、屋根裏部屋の扉の向こうから怒鳴り声が聞こえて来た。

「ユーフェミア！ 早くグリンダの着替えを手伝いなさい！」

神経質そうなその声の主はユーフェミアの義母でグリンダの母、ジュディ・ウォード・アールグレンだ。

彼女の機嫌を損ねると、躰という名の嫌がらせを受ける為、ユーフェミアは慌てて義母の元へ走る。

幼い頃に母を病で亡くし、父親が再婚してからの八年間、ユーフェミアはずっと使用人のように扱われていた。

それでも侯爵家の威厳を保つ為か、出席する必要がある舞踏会には無理矢理着飾って出席させられている。

使用人のように働かされている彼女の肌はすっかり日に焼けてしまい、手も水仕事で荒れているので、白魚のような手とは程遠い。

だから義母は苦肉の策として、肌が見えない野暮ったいドレスに手袋をさせ、肌の色をごまかす為に白粉を塗りまくるので。

そのせいでユーフェミアの素顔を知るものは屋敷の者のみとなっている。

屋敷の者も女主人であるジュディの怒りに触れるのを恐れているのか、ユーフェミアには必要最低限の関わりしか持たない……ように見せかけて、実はジュディの目を盗み、ユーフェミアを助けてくれる者は大勢いる。

ユーフェミアがグリンダの部屋へ行くと、義母と義妹の会話が部屋から漏れ聞こえて来た。

重厚な扉のはずだが、義母と義妹はすこぶる機嫌がいいらしく、大声で今日の舞踏会の話をしてるようだった。

「今日はどうだった？ 侯爵令嬢っぽく上手に振る舞えたの？」

「勿論よ。今日もたくさん笑顔を振り撒いて来てやったわ。これからしばらくお茶会の誘いや贈り物がたくさん届くかもね」

「まあ！ それは楽しみね。今度はどれくらい高価なものが届くかしら」

「私、帝国産の月輝石をふんだんに使ったネックレスが欲しいわ」

「ふふ、グリーンダつたら。そんな希少な石なんて王国の貴族が手に入れるのは無理なんじゃない？ 私だって見た事がないんだから」

「そうよねえ。こんな小国貴族の懐具合なんてたかが知れてるわよね。……ああ、ここが帝国だつたらもっと高価な物が手に入ったかもしれないのに」

「かと言って帝国に伝手は無いんだから王国で我慢しなきゃ。貴族はともかく、殿下とはどうだったの？」

「そうそう！ 今日マティアス王子とダンスを踊ったの！ ちょっと微笑んでやったら、私の事をすごく熱の籠った瞳で見つめるのよ。それにまた一緒に踊りたいですって！ 彼つたらもう私に夢中みたいなのよ。ちよつとチョロ過ぎで心配になるわ」

「さすが私の娘！ よくやったわ！ じゃあ近々婚約の申し込みがあるかもしれないわね」

「今まではウォード家の血を引いていないからって婚約者候補から外されていたけれど……殿下本人からの要望だつたら元老院のジジイ達も無視出来ないでしょ」

扉の向こうには、舞踏会で人々を魅了した美しい令嬢の様子は無く、己の欲望を隠そうともしない歪んだ笑い声を上げる少女がいた。

義母と義妹の会話内容にユーフェミアは思わず立ち竦む。

しかし義母に呼び出された手前逃げる事も叶わず、仕方なく扉を叩く。

「お義母様、ユーフェミアです」

ユーフェミアが声を掛けると、先程までの楽しそうな笑い声は止まり、不機嫌そうな声の義母が怒鳴りつけて来た。

「遅いわね！ 何グズグズしてるの！」

「人を待たせるんじゃないわよ！ さつさと入りなさい！」

「申し訳ありません」

部屋に入ってきたユーフェミアを見てグリーンダが意地の悪い微笑みを口元に浮かべる。

「そう言えばあんた、すつごく無様だったわねー。みんなあんたの事なんて呼んでいるか知ってる？ 『ぬりかべ令嬢』ですって！」

「あらあら。グリーンダ、『ぬりかべ』ってなあに？」

ユーフェミアへの悪口である言葉に興味津々の義母が、心底楽しそうにグリーンダへ問いかける。「お母様、『ぬりかべ』は東の島国で昔から伝えられている、姿の見えない壁のような魔物なんですって。ユーフェミアは白くていつも壁の花だから『ぬりかべ』のようだって」

「ホホホ。上手く表現したものね」

「でしょー？ 笑いを我慢するの大変だったのよ」

義母と義妹がユーフェミアに侮蔑の視線を向け、嘲笑う。

こうして毎日のように蔑まれていくユーフェミアは慣れたものなのか無表情で佇んでいる。無反応なユーフェミアに、苛立った義母が大きな声を出した。

「早くグリンドアの世話をなさい！ 殿下とのダンスで疲れてるのよ。香油を使ってマッサージもやってあげて！」

「私はあんたと違ってお坊ちゃん達からダンスに誘われて大変だったんだから。しっかりマッサージしなさいよ。爪の先までちゃんと手入れしてちょうだい」

グリンドアが足を組み、ツンとした表情でユーフェミアへ命令する。

「グリンドアのドレスも今日中に洗っておきなさい。丁寧^{ていねい}にね！」

「今日は全く食べる暇がなかったからお腹が空いたわ。あんた何か作りなさいよ」

次々と好き勝手に仕事を言いつける義母と義妹に内心ため息をつきながらも表情には出さず、ユーフェミアは肅々^{しよくしよく}と仕事をこなす。

屋敷の使用人達が就寝する時間もとくに過ぎ、ユーフェミアの仕事が終わったのは、夜も更^よけた真夜中だった。

くたくたになりながらも、屋根裏の自室に戻ったユーフェミアは舞踏会の事を思い返す。

着飾った貴族や贅^{ぜい}を尽くした料理、目に入るもの全てが豪華だった。

しかし彼女にとっては全く心が躍る事がない、むしろ面倒臭い行事という認識だ。

義母達に使用人扱いされるようになった当初は、母を怙^{しよ}ぶ間も無く慣れない仕事を押し付けられ絶望的になった。

それでも少しずつ仕事を覚え、慣れて来る頃にはすっかり使用人の仕事に板についてしまい、令

嬢として振る舞うよりも、働いている方が楽しいと思うようになっていた。

ただ、今日のようにグリンドアの準備に追われた上、自分も出席となると流石^{さすが}に疲労^{こんぱい}困憊^{こんぱい}だった。

ユーフェミアはベッドの中に潜り込み目を閉じると、マティアスとグリンドアが踊っている光景を思い出す。美男美女が並ぶ姿はとても目の保養だった。

王妃などに興味がないユーフェミアにとって、マティアスはただの王族の一人であり、恋愛感情は一欠片^{ひとかけら}も持っていない。むしろ早くグリンドアを引き取って貰いたいと思っている。

ユーフェミアは胸元からネックレスを取り出した。

産みの母の形見であるそれは肌身離さず身に着けている宝物だ。

義母に取り上げられそうになった事もあったが、特に価値があるものでは無いと分かった途端^{とたん}、興味をなくし、捨てられそうになったところを必死に懇願して手元に残したものだ。

形見のネックレスの鎖には、その時はまだ無かった指輪が通されていた。使用人として扱われ出した頃に出会った、初恋の少年から貰った思い出の品だ。

「ハル……」

思わず少年の名前が口から零れ落ちる。

仲睦^{なご}ましい恋人達の姿に当てられ、一人でいるのが少し寂しくなったのかもしれない。

ユーフェミアはハルと名乗った少年を思い出す。

この国では珍しく、見た事もない、黒い髪をした少年だった。

ハルは多種多様な人種が集う帝国から来たと言っていた。平民か貴族かも分からないけれど、とても明るく優しい男の子だった。

ハルから貰った指輪を握りしめる。

——せめて夢の中で逢えますように、と願いながら、ユーフェミアは眠りに落ちたのだった。

第一章 ハルとの出会い

——八年前、お母様が病で亡くなって一年も経たない内に、お父様がお義母様と半年程年下の義妹をお屋敷に連れて帰って来た。

「あなたがユーフェミアね。私が新しいお母様よ。これからはたくさん甘えてね」

「お姉さまが出来て嬉しい！ 私グリーンダ！ 仲よくしてね！」

出会った当初のお義母様は慈愛溢れる笑顔を、グリーンダは愛くるしい笑顔を浮かべ、優しく接してくれていたように思う。

しかし当時七歳だった私はお母様の死を受け入れる暇もなく、目まぐるしく変化する環境の中で置き去りにされ、気が付けばお父様は領地へ戻った後で——。

そして残された私は、早々に本性を現したお義母様とグリーンダから嫌がらせを受ける日々を送るようになった。

一緒に席で食事をとる事を許されず、部屋から出る事を禁じられた。

そして誕生日祝いに貰った贈り物や、ドレスなど高価な物は全てグリーンダに取り上げられ、唯一残った物はお母様の形見のネックレスだけ……それも懇願して何とか返して貰えた物だ。

「私専属の新しい使用人が欲しいけれど、雇うお金が勿体無いから、あんたが代わりに働いてよ」
ある日、いつもの気まぐれで発したグリンダの一言で、私は使用人として扱われる事になり、今まで住んでいた部屋からも追い出され、屋根裏部屋に住むように言いつけられた。

その横暴なお義母様達の振舞いに、屋敷で働いている人達は異議を唱えてくれたけれど、お義母様は使用人達に解雇をチラつかせる事で強引に黙らせてしまった。

使用人達は悔しそうに謝ってくれたけど、お義母様に逆らってまで庇おうとしてくれただけで嬉しかったから、「一生懸命頑張るので仕事を教えて下さい」とお願いした。

まさか全員に泣かれてしまうとは思わなかったので、すごく困ったけれど。

そうして慣れない事に戸惑いつつも、執事のエルマーさんや、今は女中頭になったダニエラさんに仕事を教えて貰いながら、早く仕事を覚えようと躍起になっていた頃――。

私はお義母様から突然用事を言いつけられた。

「王都で噂の人気店『コフレ・ア・ビジュ』で数量限定の香水が発売されるんですって！ ユーフェミア！ 早く買って来て！」

その香水を売っている「コフレ・ア・ビジュ」というお店は屋敷から離れた場所にあり、子供の足では片道三時間以上はかかる距離だ。

今から急いで向かって、とても開店時間に間に合いそうにない。

「香水を手に入れられるまで帰って来るんじゃないわよ！」

無茶振りにも程があるが、とにかく香水を手に入れないと屋敷から追い出されてしまう。

お母様との思い出が残るこの屋敷から出るなんて考えられなかった私は大急ぎで準備をし、お店へ向かった。

あのお義母様とグリンダが馬車の使用を許可するはずも無く、私は王都の街を懸命に走る。

後で聞いた話だと、私が言いつけられた時点で商品は既に予約分だけで完売しており、たとえ馬車で急いだとしても手に入るものでは無かったそうだ。

そんな事も知らずに、一生懸命息を切らしながら走ってお店に向かう途中、なんとなく顔を向けた路地の向こうから、気になる気配を感じて思わず足を止める。

頭の中では急がなきゃと思うものの、その気配が気になって仕方なかった私は目が陰って薄暗い路地へそっと足を進めてみた。

そして向かった先で、ボロボロの麻袋のような布に包まっている、何かの物体を見つけた。

その物体をよく見ると呼吸をしているかのように密かに動いているのが分かった。

……何かの動物だろうか？

魔物だったらどうしようと思いつつ、私は勇気を出して声を掛けてみる事にした。

「もしもし……？」

声を掛けたと同時に驚いたような動きをしたそれが、もぞもぞと動き出す。

そして黒い毛のようなものが見えたと思った瞬間、綺麗な青い宝石が目に入った。まるで宝石だと思ったそれは青い瞳で――。

――その瞳を見た瞬間、私の身体に衝撃が走った。

身体の奥深く、魂が在る処から、何かが溢れ出して来る。

それは懐かしくも温かい、失っていたものが戻って来てくれたような、不思議な感覚だった。

そうしてボロ布から顔を出したのは、とてもやつれた様子なのに、それでも綺麗な顔立ちだと分かる、私と同じぐらいの年齢の男の子だった。

「……………」

乾いた唇から微かに漏れ聞こえた声に、我に帰った私は慌ててしゃがみながらカバンの中のコップを取り出し、水魔法でコップを満たす。

水だけならいつでも魔法で飲む事が出来るから、きっと喉が渇くだろうと思ひ、コップをこっそり持って来て正解だったみたい。

男の子は自分で飲めないくらい弱っているらしく、そっと頭を支え起こしてコップを口につける。初めは上手く飲めなくて、口から水が溢れていったけれど、少しずつ飲んでいくうちにゴクゴクと飲むようになって来た。

水を何杯か飲み終わった頃には、男の子の渴いでいた唇も潤いを取り戻し、顔色も心なしかよくなったような……気がする。

男の子は身体を起こし、何故か驚いた様子で自分の体を見渡している。

よく分からないけれど、動けるようになったのならもう安心かな？

「……ありがとう、もうダメかと思っていたから助かったよ。俺の名前は……ハル。君の名前を覚えて？」

水を飲んで少しは元気を取り戻したのはよかったけれど、ボロボロの姿はそのままです。――だけど私には何故か、ハルと名乗った男の子がとても輝いて見えた。

私も名乗ろうと思つて口を開いたものの、本名を名乗るのが恥ずかしく感じて戸惑ってしまう。今の私の姿は侯爵令嬢ではなくただの使用人だから。

そう考えていたら、ついお母様と呼んでくれた愛称を思い出した。

「ミア……私の名前はミアです」

「そうか……ありがとう、ミア。貴重なポジションを分けて貰ってごめんね？」

「……？ ポーション？」

思いもよらない言葉に思わず聞き返す。……水魔法で出したただの水ですよ？

「あれ？ 違うの？ でもあれは」

ぎゅるるるるー！

ハルが何やら言いかけたその時、彼のお腹から盛大な音が鳴った。

「……」

「……ごめん」

ハルが恥ずかしそうに顔を赤く染めながら、ポツリと呟いた。

あれだけ瀕死の状態だったのだ。かなりの間飲まず食わずだったのかもしれない。そう思うと私は慌てて立ち上がった。

「何か食べるものを買って来るから！ 絶対ここで待っていてね！」

「え？ ミア!?」

本当はハルの側を離れたくなかったけれど、早く彼に何か食べさせてあげたかった私は市場へ向かって駆け出した。

しばらく食べていない体に何がいいか考えて、口当たりの良さそうなパンや果物を買おうと急いでハルの元へ戻る。

もういなくなったらどうしようと不安になったけれど、ハルは私が戻るまで同じ場所で待っていて、その姿にほっとため息を漏らす。

「おまたせ。久しぶりに食べるんでしょ？ ゆっくり噛んでから飲み込んでね」

ハルに買って来たものを渡すと、余程お腹が空いていたのかムシャムシャと食べはじめた。

私はさつきと同じようにコップを取り出し、魔法で水を注ぐ。

その様子をハルがパンを食べながら、興味深そうにじーっと見つめていた。

「どうしたの？」

「さつきの水もそうやって出したの？」

「ええ、お水だったら魔法で簡単に出せるもの」

「……………」

「ハル？」

「……いや、なんでもないよ。そのお水、貰っていい？」

そう言うとハルは、コップの中の水を美味しそうに飲み干した。

「美味しかったよミア。食べ物ありがとう。でも俺、今手持ちが無くてすぐに返せないんだ……」

ハルはすこく申し訳なさに謝ってくれるけど、そんなの承知の上だ。

「お金使わせちゃってごめんね。怒られるんじゃない？」

本当は香水を買う為に渡されたお金を少し使ってしまったから、このままではお金が足りなくて買って帰る事が出来ないけれど……。

足りない分は……。うーん、このネックレスを売れば大丈夫かも。

価値がないとは言ってもお義母様という事だ。きつと金銭感覚が違うに違いない……たぶん。

お母様の形見のネックレスを手放すのは寂しいけれど、ハルを助ける事が出来たのだから悔いは無い。きつとお母様も褒めてくれるよね。

「大丈夫！ 気にしないで！」

「でも……」

未だ^ま納得出来ない様子のハルを誤魔化す為に、私は今まさに思い出したかのように叫んだ。

「そうだ！ 私お使いを頼まれていたの！ 早く行かなくちゃ！」

突然叫び出した私に、ハルもびつくりして慌て出す。

「えっ!? それじゃあ、俺も護衛代わりにお供するよ！」

「で、でも……もう少し休んだ方がいいよ。それにその姿じゃ目立ちちゃうかも」

ハルの黒い髪は珍しいし、服はひどく破けてはいないものの、^{ほろ}綻んでいたりあちこち薄汚れていて、人混みの中でも悪目立ちしそうだから心配になる。

……怖い人に絡^かまれたらどうしよう。私でハルを守る事が出来るかな？

「そこは大丈夫！ ミアのおかげで魔力も回復出来たしね！」

そう言ってハルが何やら呪文のようなものを呟いた。声が小さくて聞き取りにくいけど、何かの魔法を使ったようだ。

「これでどう？」

ハルが一瞬光ったと思ったら、すっかり身綺麗になった姿で現れた。しかも髪の色が黒からよく見かける茶色に変わっている。

「ええ！ すごい！ さつきとは別人みたい！」

「ちょっと洗浄の魔法と、光の屈折を利用して髪の色を変えてみたんだ。どう？ すごいでしょ」

「うん！ 本当にすごい！ 本当にびつくりしたけど……」

「え!? 何なに？ どこか変かな？ 格好よく無かった？」

言い淀^よむ私にハルがしょんぼりしてしまったので、慌てて誤解を解く。

「違うの！ すごくカッコいいからまるで王子様みたいだけれど、髪の色はそのままの方が素敵なのに、変えちゃったからちょっと勿体無くなって……！」

信じてもらおうと両手を握り、必死に力説する私を見て、ハルは驚いたように目を^み瞠った後、それはもう嬉しそうに顔を綻^はべせた。



髪の色が変わってすっかり別人になったハルと一緒に話をしながら目的地へと向かう。

ハルは私達が帝国と呼んでいる国——バルドウル帝国からお父さんと一緒にナゼール王国にやって来たそうだ。

「お父さんは今どこにいるの？ はぐれたの？」

「親父は……うーん。多分そこにいるだろうって場所は分かっているんだけど……」

「じゃあ、早く帰ってあげないと。きつとすごく心配しているよ！」

「うん、そうだね。でも大丈夫。そのうち向こうが見つけてくれるよ」

「え？ 本当に？ どうやって？」

「んー？ 内緒？」

「えー！ 何それ！」

私の心配をよそにハルは全く慌てた様子を見せず、キョロキョロと街中を眺めている。まるで王都の観光をしているみたい。

さっきまで死にかけていたとは思えない能天気なハルの様子に、何だか心配するのも馬鹿らしくなって来た私は、何故ボロボロだったのかその理由を聞いてみた。

「うーん、やっぱり気になる？ 本当は話さない方がいいんだろうけれど、ミアには助けて貰ったし……」

魔法で茶色に変えた髪を掻きながら、言いにくそうにハルがこそっと教えてくれた内容は、ある程度予想していたものだった。

「実は俺、誘拐されたんだよね」

「……えっと」

「あれ？ びっくりするかと思ったんだけど……。まあ、あの状態を見られたら察しが付くか」

「じゃあ、ハルは誘拐されたところから逃げて来たんだよね？ だったら尚更早くお父さんに会って安心させた方がいいよ！」

「うんうん、そうだね。でもそろそろ迎えが来るだろうから大丈夫だよ」

ハルはそう言うけれど、お父さんは今いる場所を知らないだろうし……。

それに髪の色も変わっているのに、見つけられるのかな？

うーん、よく分からないけれど、きっとハルがそう言うなら大丈夫……だよね？

「……分かった」

何となく納得は出来ないけれど、きつとこれ以上言っても無駄だろう。

とりあえず気を取り直した私は、一刻も早く目的のお店に向かう為に頭を切り替える事にする。

以前お母様と外出した時に馬車の中から見た景色を思い出し、臍気ながらお店がある方向へ意識を飛ばす。

（――よし、視えた！）

しばらく集中していると、私の頭の中に「コフレ・ア・ビジュ」と書かれた看板を掲げるおしゃれなお店の映像が浮かび上がる。その情報を元に、頭の中で地図を描き、最短の道を導き出す。

魔法を使う様子をハルがじつと見つめていたけれど、近道する事に集中していた私はそんな事を気にする暇がなく……。

そうして大体のルートを理解した私は、安心してホッとため息をつく。

「……そう言えば、どこのお店に向かっているの？」

不意にハルに聞かれ、そう言えば何も言っていないなかつたな、と思い返す。

「ええっと、王都で人気のあるお店で限定の商品があるとかで、それを頼まれて……あ！」

そこで私は肝心な事を思い出して顔が真っ青になる。

（どうしよう、お金が足りなかつたんだ……）

お義母様から預かつたお金はちょうど商品と同じ金額の五万ギールだったから、ハルにあげた食べ物代千ギールがそのまま足りない。

ネックレスを売ってどうにかしようと思っていたけれど、ハルが一緒だと買取してくれるお店に行きにくい。

「……？ ミア、どうしたの？」

急に動かなくなった私をハルが心配そうな顔で見に来た。

（ハルには気付かれないようにしないと、また心配させてしまう）

どう言えば上手く誤魔化せるか悩んでいると、慌ててこちらに向かって来る人影が目に入った。

「……！！ ハルッ！！」

「あ、マリウス」

「『あ、マリウス』じゃねーよ！ 全くもー！！ どれだけ心配したと思ってるんだ！ 本当にお前という奴はー！！」

ハルを見つめるなり怒り出したマリウスと呼ばれた人は、灰色の髪と目をした顔に銀色の眼鏡を掛けた、ハルより少し年上っぽい男の子だった。

「ね？ ちゃんと迎えが来たでしょ？」

動きを止めたままの私に、ハルがいたずらが成功したような、やんちゃな笑みを浮かべる。

物すごいドヤ顔だ。

「お前の魔力を見失ってからどれ程俺達が……って、あれ？ こちらのお嬢さんは？」

ハルの隣に佇んでいる私に気が付いたマリウスさんが、興味深げな目で私の顔をじろじろと見て来る。

うーん。何か品定めされているような……？

「俺の命の恩人だ！ 変な目でミアを見るな！」

ハルが私の前にずいっと歩み出て、マリウスさんの視線から庇ってくれた。

そんなハルを見たマリウスさんは一瞬目を瞠みはつたものの、何かに気付いた顔を見ると今度はニヤニヤと企たくらんだ笑顔になる。

「……ふーん……なるほどなるほど。お嬢さんがハルを助けてくれたんだね。本当にありがとう！」

今度はニコニコと綺麗な笑顔を向けられてしまった。

……何だかすごく表情豊かな人だなー。

「そこんとちょーっとお話聞きたいんだけど、お礼も兼ねて俺とお茶しない？」

気が付くとマリウスさんに両手を握られ、じっと見つめられている私。

「ええと……」

何だかやたら距離が近いような……？

「……！ ちょ、ちょっ……！ おまつ！ 手！ 俺だってまだ……！」

そんな私達を見て慌てふためいたハルの姿に、内心焦あせっていた私の心が逆に落ち着いた。

（そうだ、ここでハル達と別れればいいんだ）

「すみません、マリウスさん。お誘いは有り難いのですが、私には用事がありますので一緒にいる事が出来ません」

ハルとお別れだと思った瞬間、胸がちくりと痛んだけれど、今は気付かないふりをしよう。

「ハルにお迎えが来て安心しました。私はここで失礼します」

私はにっこり微笑んでお辞儀する。

気持ち漏れないように、とびきりの笑顔で。

「……ミア？ 急にどうしたんだ？」

ハルが信じられないという驚きの顔で私を見る。

（——今ならまだ間に合うから。これ以上一緒にいちやダメだから）

「お礼などは結構です。お話ならハルから聞いて頂けますか？」

私がお断りすると、マリウスさんは片眉を上げ、ちらりとハルを見てからもう一度こちらに目を向ける。

「ええー？ それは困っちゃうなあ。こちらとしてもハルの恩人をそのまま帰す訳にはいかないだよ。俺達が怒られちゃうし」

「でも……」

「じゃあ、ミアさんの用事とやらを先に済ませちゃおう！ その用事の内容を教えて貰ってもいいかな？」

どうにか断ろうとしているのに、逃がさんと言わんばかりにマリウスさんがグイグイ攻めて来る。（どうしよう……）

「……ミア。ミアが急いでいるのは分かってる。だけど俺はもう少しだけミアと一緒にいたいんだ

けど……どうしてもダメ？」

しゅんとした顔のハルが、少し潤んだ瞳で私の顔を覗いて来る。

「……っ！」

そんな目で見られたら断れる訳ないって、分かっていてやっている顔だ……ずるい！

「うわー。えげつなー」

マリウスさんが吐き捨てるように呟いているけど、私にはよく聞こえない。

「……じゃあ、もう少しだけ、ね？」

「うん！ ありがとうミア！」

満面の笑顔を向けるハルに、しようがないなあと思いつつ、一緒にいたいと言われて喜んでいて自分がいた。

「……えーっと、じゃあ改めて聞くけど、どこに行く途中だったのかな？」

何となくマリウスさんの雰囲気やさぐれているけれど、大丈夫かな？

「あ、はい。『コフレ・ア・ビジュ』っていうお店なのですが」

「コフレ・ア・ビジュ!？」

店の名前を聞いたマリウスさんの目が光ったように見えたのは気のせいかな。

「マリウス知ってるの？」

「そりゃあ、知っていて当たり前だろ？ ……っていうか、どうしてハルが知らないのか不思議だよ、俺は」

……どういう事だろう？ 不思議そうにする私にマリウスさんが教えてくれた。

「コフレ・ア・ビジューは帝国が本店のお店なんだ。最近この王国に支店を出したって聞いた事ない？ 今は帝国から皇帝が来ているからね、それにちなんだ商品も発売されているらしくって、色々話題になっているらしいよ」

(えー！ 今、皇帝が来ているの!?)

「実に十年振りの国王と皇帝の会談だからね。それを記念に限定発売の商品が——って、もしかしてミアさんの用事ってそれ？」

「……！ はい、そうです！ その限定品の香水を買って来て欲しいと頼まれて……」

「そうなんだ。じゃあ、運よく予約出来たんだね」

「……え？」

(……なに、それ)

予約なんて話を聞いていない私は不安になる。

本当はお義母様の勘違いで、私に伝えるのを忘れていたなんて……事はないのだろうか。

明らかに顔色が悪くなった私にハルやマリウスさんが心配そうな視線を向ける。

「もしかして、ミアは予約の話を知らなかったの？」

「……うん。何も……。ただ買って来てって言われただけで……」

「それはおかしいなあ。とにかく人気がすごくて、予約出来た人にだけ販売する事になっているから、店に行けば誰でも買えるってものじゃないはずだけど」

——マリウスさんの言葉に、私は目の前が真っ暗になった。

『予約出来た人にだけ販売する』

私はマリウスさんの言葉を頭の中で反芻する。

——もう二度とお屋敷に帰る事が出来ないの？

頭の中がぐるぐるして、気持ちが悪い。

気が付いたら私の目からは涙が零れ落ちていた。

「ミ、ミア！」

いきなり泣き出した私にハルがオロオロとしている姿が視界に入る。

「どうした!? その香水が買えないと何か困るのか？」

ハルが心配してくれるけれど、自分の事情を説明するのはどうしても嫌だった。

——私が、お義母様や義妹に虐げられているなんて……。

どう説明すればいいのか分からなくて何も答える事が出来ない私に、二人が困っている雰囲気伝わってきて、申し訳なくて情けなくて、更に涙が溢れてくる。

「まずは泣き止んでくれるかな？ それから一旦ここから離れよう」

マリウスさんが胸元からハンカチを取り出すと、そっと目元を拭ってくれた。

さりげなく優しい所作と綺麗な顔が近くにあつて少しドキッとすする。

「……っ！ マリウス！ またお前は……！」

何やら悔しそうに齒軋りするハルが可笑しくて、思わずクスッと笑ってしまう。

そのおかげか、涙はいつの間にか止まっていた。

「……器うつわが小さいねえ」

「……！ てめえ……！」

「まあまあ、ほらチャンスをおあげるから。早く行こう？」

またココソと二人で話しているけど、何を言っているのかよく聞こえない。

何を話しているのかな、と思って近づいてみると、ハルがパッと顔をこちらに向けて腕を伸ばし、私の手をぎゅっと握る。

あまりに自然なその動きに、手を繋つながれたのだと、すぐには気付かなかった。

「え、えつと、ハル……？」

「とりあえずそのお店に行ってみようよ」

「……え、でも……。今から行っちゃって……」

もう香水は手に入らないんじゃないか……と言いかけた私に、マリウスさんがすごく申し訳なさそうな顔をして言った。

「ごめんミアさん。もう少しだけハルに付き合ってくれるかな？ 悪いようにはしないからね？」

「……はい」

二人にそう言われると、きつと断るのは無理だろうなと思った私は大人しくついて行く事にした。——ハルが握ってくれている手から伝わる体温が温かい。

私の手はもう貴族令嬢のように綺麗じゃなくて恥ずかしいけれど、ハルと手を離すのは嫌だった。そんな私達をマリウスさんが後ろからニヤニヤと笑みを浮かべながら眺めていたけれど。



ハルの手に気を取られているうちに、目的のお店の前に辿たどり着いていた。

「わあ……！」

お店はガラス張りのとても綺麗な三階建ての建物で、お店全体がキラキラ輝いて見えた。

さっきは魔法で看板をチラッと覗いただけなので、実際のお店がこんなに素敵だったのにはびっくりした。

「ほら、中に入ろう」

自分から入るには躊躇ためらいそうなお店だったけれど、ハルが手を引いてくれたおかげで自然と中に入る事が出来た。

「……すごい」

外から見ても素敵だったけど、中に入ってもすごかった。

エントランスは吹き抜けで開放感があり、所々に花や緑が飾ってある。

女性向きのお店かと思ったら、紳士用や子供用の物まで置いてあった。並んでいる商品はとても

洗練されていて、どれを見ても素敵だった。

私が興味津々で商品を見てみると、ハルが色々と説明してくれた。

「これは今帝国で人気のブランドなんだ。デザイナーも天才って言われているけれど、ちょっと変わった奴なんだ」

「これを作った工房は昔から独自の技術を受け継いでいて、その技法は門外不出なんだよ」

「この布に使われている染料は特殊だね。中々この色を出すのが難しいらしいよ」

ハルはとても詳しく、他にも色々な事を、私にも分かりやすく教えてくれた。

(ハルってもしかすると帝国から来た商人の息子なのかな?)

アクセサリー売り場では指輪やネックレス、ブレスレットに髪飾りなどが綺麗にディスプレイされていて、華やかな女性達で溢れかえっている。

珍しい色の宝石がついた指輪や、細かい細工の髪飾りは眺めているだけでとても楽しい。

食い入るようにアクセサリーを見ていると、私の顔を覗いたハルが面白そうに言った。

「ははは。ミアはアクセサリーに興味津々だなあ。目がキラキラしてるよ」

ハルのその言葉に、ずっと見られていたんだと気付いて恥ずかしくなる。

「ハ、ハル！ ずっと見ていたの!? ずるいよ！」

「ずるいって……ははっ！ ミアは可愛いな」

「……っ！」

思いがけないハルの言葉に全身が真っ赤になる。

あわあわとする私とは反対に、ハルはくすくすと笑っていて、余裕そうな態度が憎たらしい。

「うう、からかうなんて酷いよ！ ハルの意地悪!!」

私の抗議にハルはきよんとすると、申し訳なさそうな表情をする。

「えー？ そんなつもりは無かったんだけど……嫌な気分になせちゃったかな？ ごめんね。でもミアを可愛いと思っただけは本当だよ」

「……か、かわっ……！」

再びハルに可愛いと言われてしまい、落ち着きそうだった顔の火照りが再発してしまう。

(……ああ、もう！ このままじゃ、顔が赤いま戻らないよ……！)

未だに真っ赤になっている私を、ハルは愛おしそうに、優しい瞳で見つめると、握っていた手にぎゅっと力を込めた。

ハルのそんな一挙一動に、私の心臓はドキドキして落ち着かない。

私の心中を知ってか知らずか、ハルは満面の笑みを浮かべて再び店内を歩き出す。

「ねえ、ミア。この中でどれか欲しいものはある？」

ふと、ハルが私に質問をして来たので、店内を見回して考えた。

(欲しいもの……どれもとても素敵だけれど……)

「ううん、欲しいものは無い、かな」

「……そう」

何故かハルが残念そうな顔をする。

(本当はどれも素敵だから、欲しいものはいっぱいあるけれど……)

「ごめんね。どれも素敵過ぎて選べないの。それに見ているだけで十分満足だよ」

もしどれか一つでも買って帰ったら、絶対お義母様とグリントダに取り上げられちゃう。

「でも、ハルの説明はすごく分かりやすかったよ！ お店丸ごと欲しくなっちゃった！」

「本当!? ミアが欲しいなら俺の私財——」

「はいはい！ ストーツプ！ ハル、ちよつと落ち着こつか」

ハルが何かを言いかけていたけれど、マリウスさんが強引に遮った。

(そう言えばマリウスさん、しばらく姿が見えなかったような……)

「二人とも、ちよつとこつちに来て貰っていいかな？ 会わせたい人がいるんだ」

マリウスさんが手招きしながらお店の奥へと向かうので、慌てて付いて行く。

途中で「買取カウンター」という看板を見つけ、ここで買い取りもしてくれる事を知った。

……ネックレス買い取って貰えるかな？

沢山いたお客さんは、奥へ行けば行く程減っていき、陳列している商品も、見るからに高価なものになっていった。

私達は思い思いに商品を選んでいる貴族や執事らしい人達の間を通り抜け、更に奥へと導かれる。

「この部屋だよ」

マリウスさんが重厚な扉を開けると、高級そうなテーブルとソファアが置いてある部屋に通され

る。どうやら商談用の部屋らしい。

「ここに座って待ってようか」

「あ、あの、勝手に入って大丈夫なですか？」

「ちゃんと許可は取ってあるから大丈夫だよ」

(マリウスさんが許可を取ってくれているというのなら大丈夫なのかな……?)

部屋に入るのはちよつと怖くて躊躇ったけれど、マリウスさんの行動があまりに自然だったので、私は言われるがままに、ハルと一緒にソファアへと腰掛けた。

マリウスさんは座らずにハルの後ろに立っている。

(……まるで護衛か従者みたいだな)

ソファアは座ると身体が沈むような、でもとても座り心地がいい物だった。

お屋敷のソファアよりよっぽどいい品なのが私でも分かる。

このお店に入ってからずっとここまで、周りの何もかもが高級品だったので、壊したり汚したらどうしようと気になって、何だかそわそわしてしまう。

美術館でしか見る事が出来ないような調度品が並ぶ室内を見ていたら、扉がノックされる。

そして「失礼します」と言う声の後、お茶を持った使用人らしい女性が入って来て、流れるような所作で紅茶を淹れてくれた。

紅茶のいい香りが部屋中に広がり、とても高級な茶葉を使っているのが分かる。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます！」

使用人さんから紅茶を受け取り、お礼を言う。

恐る恐る飲んでみると、爽やかな風味が鼻を抜けていき、気分が落ち着いていく。

——すごく美味しい！

茶葉もいいけど、淹れる人の腕もすごくいいのだろう、とても美味しい紅茶だった。

(私もこんなに上手く淹れる事が出来るようになりたいな……)

紅茶を飲んでみると、また扉がノックされる。次に入って来た人は、柔らかそうな物腰だけれど、ちよつと怖い目をした年配の男性だった。

「お待たせして申し訳ありません。私、この店舗を営むランベルト商会の会頭でハンス・ランベルトと申します」

「は、初めまして！ ミアと申します！」

「ははは、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ、可愛いお嬢さん」

笑うと優しくそんな雰囲気になるハンスさん。やり手の商人人つて感じ。

「私はいつも帝国の本店に身を置いているのですが、会談が行われると聞いて最近王国に来たのですよ。この機会に王国で商売を広げようと思ひましてね」

「そうなのですね。先程店内を見せて頂きましたけれど、どれも素敵なものばかりで感動しました」

思ったまま正直に感想を言うと、ハンスさんが目を細めて私を見る。

「それは嬉しいですね。このお店は私の息子が企画して出したお店なのです。褒めて貰えて息子も喜ぶでしょう」

ハンスさんと話していると、マリウスさんが声を掛けて来た。

「……会頭、そろそろお話を伺いしたいのですがよろしいでしょうか」

私より年上らしいとは言え、畏^{かしこ}まった口調が凄く大人っぽいんだけど……マリウスさんって一体何歳なんだろう。

「ああ、そうでしたな。これは失礼しました。可愛いお嬢さんとお話し出来たものだからつい」
ははは、と笑うハンスさんに、マリウスさんが話を切り出した。

「実は、こちらのミアさんがこのお店で取り扱っている商品の購入を希望されているのですが、予約限定商品だったようです。お店の方に確認を取ると、既に売切れで入手が困難だと伺いました」

「ああ、『ミル・フルール』の事ですね？ お陰様で予約が殺到したので予約すら出来ないお客様がたくさんいらっしゃいましたよ」

「それを踏まえて会頭にお願ひなのですが、ミアさんにその商品を一つ融通^{ゆづ}して貰えませんか？」

「……！ え!?」

マリウスさんのお願ひに私の方が驚いて、思わず声を出してしまった。

話の流れでハンスさんは分かっていたみたいだけれど……。

「……貴方^{あなた}が私にそのような願ひをされるとは……こちらのミアさんと仰^{おつこ}るお嬢さんとはどのよ

うなご関係で……?」

ハンスさんが鋭い目をしてチラリと私に視線を投げる。

「ミアさんは私の主の命の恩人です」

「……! 何と!」

「……え!」

マリウスさんの言葉に、今度はハンスさんも驚いて、目を開いたまま固まっている。

……驚いた内容は私と違うようだけど。

ハンスさんはしばらくハルの顔をじっと見ると、何かに気付いたのか、ハツとした表情をした。

私の方はマリウスさんの主がハルという事にびっくりだ。

対等ではないにしろ主従関係があったなんて……。

ちらりとハルを見ると、特に動じた様子もなく、悠々とお茶を飲んでいた。……大物?

でも、二人が主従の関係だとすると、マリウスさんも商会関係の人なのかな? ハンスさんと顔

見知りだし。

そこで私はハツと気が付いた。

(……もしかしてライバル店同士!?)

そう考えると合点がいく。

ハルはライバル店に無茶なお願いをしようとしているのかもしれない……! 私のせいで……?!

(どうしよう、ハルが弱みを握られちゃう……!)

ハルとマリウスさんの立ち振舞いや、ちょっとした仕草などを見る限り、二人はかなり教育の程度が高い事が分かる。

お互いの言葉遣いは砕けたものだけど、端々に気品のようなものを感じるし。だとすると、ハル達のお店も帝国にある大きな商会なのだろう。

(もしライバル店にこんなお願いをして借りを作ってしまったら、ハル達のお店に不利な条件で取引を要求してくる可能性が……!)

ちらっとハンスさんを窺うと、とても真面目そうだし、そんな悪い人には見えないけれど……やり手の商人みたいだし、きつと見た目で判断しちゃ駄目だよ。

ハル達に迷惑を掛けてしまうのは絶対に嫌だったので、自分からこの話は断ろうと思い、口を開こうとしたら、今まで黙っていたハルがぼんっと私の肩を叩いた。

「ねえ、ミア。何か変な事を考えてない?」

「……え? これで弱みを握られてしまったら、ハルのお店が……あ!」

「……………」

ハルに聞かれ、思わず考えていた事がポロっと出てしまった。

三人とも真顔で無言になって……!

(どうしよう! きつと不快に思ったんだ!!)

「あ、あの……す、すみません……! 私、大変失礼な事を……」

私の顔色は青を通り越して白くなっているかもしれない。身体もプルプルと震えて来た。

(……ああ、このまま倒れてしまいたい……!)

ハンスさんの反応が怖くて俯うつむいたままの私の頭上から、ハルが吹き出した声でした。

「……ぶはっ！ わはははは！ あーたまんねー！ ミアって面白いなー！」

ハルがお腹を抱えてヒーヒーと笑っている。

その反応に驚いて顔を上げると、マリウスさんとハンスさんも肩を震わせて笑いを堪こらえている。

「……え？ え？」

みんなが笑っている理由が分からない私に、マリウスさんが答えを教えてくださいました。

「……くっ、大丈夫だよミアさん。俺達は商あきないを生業なりわいとしてしている訳じゃないから。まあ、会頭と親達は何かしらの取引はしてるだろうけどね」

「そうそう、だから変な心配はしなくていいよ。それに——これは俺個人の取引として扱うから」

ハルはそう言うのと背筋を伸ばし、ハンスさんに真面目な顔を向ける。

その表情はキリッとしていて何だか別人のよう。

「ランベルト商会会頭、ハンス・ランベルト。俺は『ミル・フルール』を所望しょうぼうする。速すみやかに献上せよ。その代償として俺がランベルト商会の後ろ盾だてとなる事を約束しよう」

ハルの宣言にも似た言葉に、ハンスさんが驚あきも露あらわに身を乗り出す。

「本当ですか!? それは我々にとつて願ねがってもない事です……! ……いや、しかし……それでは代償が釣り合わないのではないのでしょうか？」

「それは構わない。何よりミアがこの店を気に入ったそうだから。それに、これからお前には自分に俺の役に立って貰もらうつもりだ」

「……畏まりました。このランベルト商会会頭、ハンス・ランベルト、喜んで貴方様のお役に立って見せましょう！」

私はハルとハンスさんの会話についていけずポカーンとする。

——何だかすごい会話を聞いてしまったような……。

「君、例の物を」

ハンスさんが控えていた使用人さんに指示を飛ばす。

使用人さんは「はい」と言うとお辞儀をして部屋から出てしまった。

「今お持ちしますので、しばらくお待ち頂きますか？」

「……ふん。やはり予備を持っていたか」

お互い含みがある笑みを浮かべているけど、目が全く笑っていない。

「……ねえ、ハル。一体どういう事なの？」

私はさっさから行われている駆け引きの意味を教えて貰もらおうと、ハルの服の裾すそをくいくいと引く張はった。

「ふふっ、大丈夫だって。ミアは何も心配しなくていいから、とりあえず俺に任せてくれる？」

「で、でも……。後ろ盾がどうかって——」



——結局ハルに迷惑を掛けるのでは、と言いかけた時、ノックの音がして先程出て行った使用人さんが箱のようなものを抱えて帰って来た。

「ああ、ご苦労」

ハンスさんが使用人さんに箱を置くように目配せすると、使用人さんは持っていた箱をそっと机の上に置いた。

「……わあ……！」

机の上に置かれたのは、繊細な花のガーランド模様の生地でカルトナージュされた箱だった。

「さあ、お嬢さん。どうぞ箱を開けて、中を確認して見て下さい」

ハンスさんに促され、恐る恐る箱の蓋を開けてみると、落ち着いた色合いのベルベット生地のクッションに包まれた香水瓶が入っていた。

「……すごい……綺麗……！」

香水瓶は繊細に彫金された飾りとガラスで出来ていて、あまりの美しさに感嘆のため息が漏れる。そんな私の反応に満足そうに頷いたハンスさんが「ミル・フルール」の説明をしてくれた。

「この香水瓶はクリスタルガラス製でしてね、クリスタルタイユで形を作ったものなのです。その香水瓶に付いている飾りは銀板に彫金したもので、レースのようにカットした透かしをつけ、淡い金色の金鍍金を施してあるのです」

知らない単語が沢山並んでいる説明に半分も理解出来ないけれど、とてもすごい物だという事が私でも分かる。

「この彫金飾りをクリスタルガラスの瓶へびったりと添わせております。栓も銀製の花と植物の彫金仕上げで、同じく銀のチェーン付きです。彫金飾りは表裏だけでなく、側面も全て香水瓶を取り巻いております。我が帝国随一の金銀細工工房の宝飾彫金師による作りで、その工房では一つ一つ注文を受けて作っているのですよ」

(……やっぱりよく分からないけれど、瓶だけで相当な価値があるみたい)

ハンスさんの説明が段々白熱していくので、理解が追いつかなくなってきた。

「そして中に封入されている香水ですが、『ミル・フルール』——これは千花模様、万華模様という意味で、まあ簡単に言うところの〈千の花〉ですね。その名前の通り、多種多様な花のエッセンスをふんだんに使用しております。植物香料は百合、ヘンナやサフラン、マルメロに檸檬、葡萄の花などから取れるものですが、その中からさらに厳選された素材を我が商会自慢の調香師がブレンドしておりますまして、この世に一つしか無い香りを——」

(どうしよう、ハンスさんのうんちく話が止まらない)

「会頭、説明が長すぎる」

困っている私を見かねたのか、ハルがハンスさんの暴走を止めてくれた。

「……！ これは失礼致しました。語り出すとつい止められませんか？」

ハンスさんが申し訳なさそうに、私の顔色を窺うように言ってきた。

「……それで、いかがでしょうか？ こちらの商品でお間違いないですか？」

「は、はい！ とても素晴らしいものを見せて頂きありがとうございました。確かに私は香水を

買ってくるように言われていますけど……」

言い淀む私にハンスさんが怪訝な顔を向ける。

「何か疑問に思う事がありましたら、どうぞ遠慮なく仰ってください結構ですよ？」

ハンスさんの言葉を聞いて、隣にいるハルを見ると、にっこり笑って頷いてくれたので、思い切って言ってみる事にした。

「あの、こちらは本当に私が欲しい香水なのでしょうか……？」

「……と言いますと？」

私の疑問にハンスさんの眉がピクリと動いた。

思わず竦みそうになるけれど、何とか言葉を続ける。

「はい、実物を見せて頂き、お話を聞かせて頂いて思ったのですが、私が頼まれたものよりもっと高価な品のように感じられるのです……。正直、預かって来た金額で買えるものとは思えません」

私が預かった金額は五万ギール。普通の香水が大体五千から一万ギールだから、それでも高めの金額なのだろう。

——でも、どう見ても瓶だけで二十万ギール以上……もしかすると五十万ギールはするかもしれない。桁が違ってしまふ。

「ほうほう、なるほどなるほど。お嬢さんは物の価値をよく分かっているらしいわ」

ハンスさんが感心したように頷きながら、椅子に深く腰掛ける。

「確かにこちらは店で売っている『ミル・フルール』とは違います。でも、違うと言っても瓶だけ

で中の香水は同じものです。お嬢さんにお見せしたこちらの品は、さるお方へ献上する為に作った試作品なのですよ。しかし試作品とは言っても献上品と何ら遜色そんしよくはありません」

「試作品……」

確かに、売りに出せば欲しがらる貴族は沢山いるだろうな、と思う。

「今、こちらの手持ちはその試作品しかありません。一般販売の方は帝国からの取り寄せになりまして、今すぐという訳にはいかないのです。よければそちらの品でご納得頂きたいのですが」

試作品でも中身が同じなら問題ないはず。手に入るのなら、お義母様も文句は言わないと思うけれど……。そもそも一体いくらするのだろう……？ とてもお金が足りると思えない。

「……お気遣いありがとうございます。ただ、恥ずかしながら手持ちが無いので、こちらの品を頂く訳にはいかないのです」

「何を仰います！ もちろん、お代は結構ですよ。こちらとしましては既に十分な対価を頂いてますからね」

——でもその対価は私ではなく、恐らくハルが払ってくれるものだ。

「いえ、そういう訳には——」

「じゃあ、こうしよう！」

なかなかうんと言わない私の言葉を、何かを思いついたハルが遮った。

「その香水は取引の代償に俺が貰うから、それをミアにお礼としてプレゼントするよ！ どう？ それならいいでしょ？」

お礼にしては高すぎるプレゼントなのだけれど……でも、これ以上断るのはハルにもハンスさんにも申し訳ないし。

よくない頭でどうすれば一番いいか考えて——そうだ！

「ありがとう、ハル。じゃあ、その『ミル・フルール』は私がハルから買い取るね」

「え？」

「あ、でも……その、買い取るって言ったけど……本当はね、持っているお金全部出しても足りないの……」

思わず勢いで買い取るなんて偉そうな事を言ったものの、お金が足りない事が恥ずかしくて顔が真っ赤になってしまう。

「……だから、足りない分はこのネックレスで払えないかな……？」

私が服の中から形見のネックレスを取り出してハルに見せると、ネックレスを見たハル達がはつと息を呑むののが分かった。

「お嬢さん、それは……！」

ハンスさんが驚きに目を睨なり絶句してしまった。

（……やっぱり買い取りは無理かな？ お義母様が価値無しと言って捨てようとしたものだし）

「ごめんなさい……今はこれしか持っていないから、全然足りないと思うけど……その分出来たら割引してくれたら嬉しい……な」

（さすがに厚かましかったかな？ たとえ五万ギールあったとしても全然足りないだろうし……）

「……っ！ミア！そんな事ぶっ！」

感極まったような顔をして、私に抱きつこうとして来たハルの顔を、マリウスさんが押しのけた。

「……！痛くてえ……！！」

「ハル大丈夫!? 今首がグキって言ったよ!？」

心配する私をよそに、マリウスさんは手をひらひらさせながら言った。

「ああ、いいのいいの。こいつ丈夫だから。で、ミアさんに聞きたいんだけど、このネックレスはどうしたの?」

「お嬢さん、これを何処で手に入れたんです?」

マリウスさんと我に返ったハンスさんが食い気味に聞いてきてちよつと怖い。

「あの、母の形見なのですが……何か……?」

（あれ? もしかして価値があったりするのかな?）

「ミアのお母さん亡くなってたんだ……」

ちよつと期待してしまった私の横で、ハルが悲しそうな顔をして呟いた。その悲痛な表情を見た私はハルに安心して欲しくて慌てて説明する。

「うん、一年ぐらい前に病気でね。でもいっぱい愛情は貰ったし! 助けてくれる人達もいるから! 大丈夫だよ!」

努めて明るく振る舞う私にハルは「そっか……」と言って、一応納得(?)してくれたみたい。

「お母さんの形見か……失礼だけど、他に遺品は何か残っていますか?」

ハンスさんがネックレスを眺めながら質問して来たけれど、他は全てお義母様に取り上げられてしまったから、今はこのネックレスが私の全てだ。

「……いいえ。他は何も……」

私の言葉に「うーん」とハンスさんが唸った。

「じゃあ、これはミアが持っていないよ! 大事な形見なんでしょ?」

ハルがネックレスを私の手から取ると、今度は首にかけてくれた。

近くに来たハルの綺麗な顔に、思わず胸がドキッとする。

「……え、でも……」

「いいからいいから! 本当は俺がプレゼントしたいけど、ミアは受け取ってくれないんでしょ?」

「無理無理! とてもじゃないけど無理!」

（そんな高価なもの、いくらハルからのプレゼントだとしても受け取れないよ!）

「ミアさん、本当にそれでいいの? セっかくだし貰っておけば?」

マリウスさんもそう言ってくれるけれど……。

「いえ、それがいいんです。ハルのおかげでもう手に入らなかったはずの『ミル・フルール』を買う事が出来るなら、それだけで十分です」

「……ミア……!」

私の言葉を聞いたハルに、感極まったような顔で見つめられて、ちよつと恥ずかしい。

「ふーん。欲が無いねー。しかもまけてって言ってるけど、それ、ハルに食べさせた代金分でしょ?」

「何だって!?!」

「……うっ。黙っているつもりだったけどマリウスさんにはバレちゃってる。」

「ミア、本当?」

言葉に詰まってしまった私に、確かめるようにハルが顔を覗いて来たので、仕方なしに頷いた。

「……うん」

出来ればハルには知られたくなかったけれど。

「……そっかー。そんな大事なお金を使ってまで俺を助けてくれたんだね」

ハルが眩まぶしそうなものを見るような目をして私を見る。

改めて言葉にされるとすごく恥ずかしくて思わず俯うつむいてしまう。

「——では、商談成立ですか」

話がまとまったと判断したハンスさんがホッとした表情を見せる。もしかしてすごく心配させてしまったのかも。

「ハンスさん、貴重な品をありがとうございます」

「いやいや、先程も申し上げた通り、こちらにとって得はあれど損はありませんからね。私の方がお礼を言わなければならぬです」

「ハンス、手間を取らせた。詳しい話はまた帝国に戻ってから頼む」

「勿論です。いつでも私をお呼び下さい。馳せ参じます故」

綺麗な袋に入れて貰った「ミル・フルール」をハルから受け取り、代金が入った袋をハルに渡す。

——無事、「ミル・フルール」が手に入った。すごく嬉しい……!

そしてハンスさんに挨拶をしてからお店を後にして、ハル達と一緒にもと来た道を辿る。

本当に素敵なお店だったな、と思いつながら空を見上げると、もう空がだいたい橙色に染まりかけていた。朝早くに屋敷を出て来たのに、随分時間が過ぎていたみたい。

「早く帰らなきゃ……!」

あまり遅くなってしまうとまたお義母様に怒鳴どなられてしまう。もしかすると食事を抜かれてしまうかもしれない。

慌ててハル達の方を見ると、その向こうから何やら白いものが飛んで来るのが見えた。

「……あれは」

その白いものは鳥だったみたいで、ハルの頭の上をくると一回転すると、今度はハルの腕に留まり、「ぴい」と一声鳴いた後、その姿が手紙に変わる。

(わあ! 急ぎの用事に使われる風の魔法だ……!)

話に聞いた事はあったけれど、見るのは初めてだ。

受け取った手紙を確認するのかな? とハルを見ていたら、手紙を開けずにポケットに仕舞い込んでしまったので驚いた。

「ええ！ 手紙読まなくていいの!？」

「いいのいいの。どーせ内容なんて読まなくても分かってるし」

けるとした顔で言うハルの後ろからにゅっと手が伸びて来て、ポケットの中の手紙を取り出す。「(ロワ・ブラン) を使ってまで連絡して来るって事は、すごく急ぎの用事なんだからさ。ちゃんと読んであげなよ」

ちなみにこの(ロワ・ブラン) は任意の相手の魔力を辿って連絡を取り合う事が出来る魔法だ。マリウスさんが、取り出した手紙の封筒を破って中を確認すると、ジロリとハルを睨む。

「これ以上待たせるのは、ハルにとってもよくないよ？ 分かるよね？」

マリウスさんが言い聞かせるように言うと、ハルは苦い顔をしていたけれど、しばらくすると諦めたように「ちっ」と舌打ちをした。

「わーったよ。また閉じ込められたらたまんねー。今日はおとなしく帰る事にするよ」

「今日はつてところが気になるけど、まあいいや……。ミアさん、俺達急いで帰らないといけなくなっちゃった」

「……ミア、送ってあげられなくてごめん……。俺、もう行かないと……」

「ううん！ まだ明るいし、ここまで来たら大丈夫！ 早く帰ってお父様を安心させてあげて？」

本当はお別れが残念ですごく寂しかったけれど、気付かれないように無理矢理笑顔を作ったのに。そんな私を見ると、ハルは少し寂しそうな顔をして——そっと私を抱きしめた。

「ひゃあ……。ハ、ハルっ……。！」

突然の事に驚いて、思わず変な声が出てしまう。

「……すごく恥ずかしい！ 全身が真っ赤になっているのが自分でも分かる。」

「ミア、助けてくれてありがとう！ 君に逢えて本当によかった……。！」

「……わ、私も……。ハルと出逢えて嬉しかったよ……。！」

私も背中に腕を回して、ハルをそっと抱きしめる。

「またミアと会いたいな。どうすれば君に会える？」

「……そ、それは……。その……」

今日みたいに外に出られる事なんて滅多にない。約束したとしても果たせるかどうか……。

「ハル、いつまで抱きしめてるの？ ミアさんが困ってるよ」

マリウスさんに言われ、ハルが洪々と腕を外すと、体から温もりが離れて行く。

「ミア、お願いがあるんだ。今度会う時まで、この指輪を預かっていてくれない？」

ハルは私にそう言うと、胸ポケットから指輪を取り出した。

その指輪は白っぽい金色をしていて、表面には桜の花の意匠と文字のような細かい模様が彫られている。

(あれ？ お母様のネックレスとよく似た材質のような……。?)

「……。!! ハルっ……。!!」

その指輪を見たマリウスさんが珍しく狼狽える。そんなマリウスさんにハルが一言。

「黙れ」

「……！　しかし……！」

それでも尚、声を上げようとしたマリウスさんを、ハルが威圧を込めた鋭い目で制す。

「……っ！　分かったよ……。でも、どうなっても俺は知らないからね！」

マリウスさんが降参とでも言うように両手を上げてため息をついた。

「……ああ、全ての責任は俺が取る」

マリウスさんは納得したみたいだけれど、大丈夫なのかな……？

二人にしか分からない事情があるっばいけれど。

「ええっと、ハル、大丈夫なの……？　すごく大切な指輪なんじゃ……！」

「そう、すごくすごく大切な指輪なんだ。だから絶対失くさず^なに持っていて欲しい」

言っている事はメチャクチャだったけれど、ハルの真剣な目に押されたら断れるはずもなく……。

ハルから受け取った指輪をきゅっと握りしめる。ハルの体温がなくならないように。

何だかハルへの執着がすごい。出逢ったばかりなのに、ハルが絡むと簡単に感情が揺さぶられる。

(どうして……？)

その疑問は、考えるまでもない簡単な事だった。

(——そうだ、この感情が恋だ。私はハルに恋をしたんだ……)

私は決意を込めて、こっくりと頷いた。

「分かった！　絶対失くさないから！　……だから……だから、また必ず王国に来てね……？」

「うん！　約束する！」

キラキラと輝くようなハルの笑顔を目に焼き付ける。いつでも思い出す事が出来るように。

——ハルとまた会える約束が出来て嬉しい。

別々の国で暮らしている私達が、簡単に会う事は出来ないだろうけれど、私が指輪を持っている限り、この約束はずっと続くんだ——

——そうして私達は再会を約束してお別れした。お互いの姿が見えなくなるまで、手を振り続けながら。